甲状腺外科草子 64

カメラ好きの系譜

杉野　圭三

カメラ好きの父であった。子供の頃、家にあったカメラはコニカ１型（1948 年）。

コニカⅠ型、ヘキサノン 50/2.8

手に持つとズシリと金属の塊の様な重量感が実感できる。ピント合わせは二重像合致式で極めて容易。レンズはコニカ自慢のヘキサノン 50、F 2.8、素晴らしい解像度のレンズと高い評価を受けてきた。シャッター速度のムラがあり、オーバーホールに出したがほぼ満足な出来上がりとなった。実際の写真も鮮明な解像度で 75 年前のカメラとは思えないできである（現在、写真フイルムはネガ、ポジとも製造中止状態）。

コニカⅠ型で撮影（F 5.6, 1/250、10 年以上放置した期限切れの Sensia 100 を使用、発色不良+）

この様な環境か遺伝かどうかは不明だが、いつしか私もカメラ好きとなっていた。

外科医 2 年目の赴任先（中国労災病院）でカメラの必要性に気づき購入したのが、当時のベストセラー「キャノン AE-1」。「連写一眼」のキャッチコピーで有名となった大ヒット製品である。シャッター速度優先の AE（自動露出）カメラで、手振れリスクの低い優れモノと評価されていた。

キャノン AE-1,　FD 50/3.5 マクロ

AE-1 と同時に購入したのが、50mmのマクロレンズ（FD50,3.5）である。等倍マクロではなく 0.5 倍までのレンズであるが実用上十分なマクロレンズであり、シグマの標準ズームレンズと共に長く使用し、現在も絶好調の状態である。キャノンの当時最高峰カメラはキャノン F1―N（後期型）であったが、若手外科医の安月給では高嶺の花で、泣く泣く諦めた。

この AE-1 は 10 年近く愛用し、子供が生まれた時も病室で撮りまくり、当時の産婦人科主治医からあきれられる始末であった。長年この 1 台で満足していたが、たまたま買った雑誌に掲載されていたカメラ特集に目が留まったのが運のつきであった。特に、当時人気のあったリバーサルフィルムのベルビアの派手な色彩に目が奪われた。

ニコン New FM2, 60/2.8,マイクロ

あれこれと吟味を重ねた結果、ニコン New FM2 を購入したのが長いカメラ遍歴の第二ステージ開始であった。

（　一甲状腺外科医の徒然なる随想　）

2023 年 5 月 12 日